

実践のまとめ（第4学年 社会科）

長岡市立表町小学校 教諭 松井 寛明

1 研究テーマ

学習課題を問い直しながら多角的思考で追究する児童の育成

～アントレプレナーシップ教育の視点を導入した「地震にそなえるまちづくり」の実践～

2 研究テーマについて

(1) テーマ設定の意図

現代社会は、グローバル化と情報化の急速な進展により、予測困難な変化の時代を迎えている。特にAIの進化は目覚ましく、AIは与えられた目的を効率的に処理し、最適解を導き出すことに長けている。しかし、新たな目的そのものを創造し、未だ存在しない価値を生み出すことは、人間固有の能力である。これからは生きる児童には、自ら問いを立て、多様な情報を様々な視点から見つめて本質を見抜き、協働しながら新たな価値を生み出す力が求められている。また、新潟県教育委員会は、「様々な社会変化の中で、主体性をもって課題に挑む人材を育成」することをアントレプレナーシップ教育と定義し、重点課題としている。これは、さまざまな困難や変化に対し、与えられた環境のみならず、自ら枠を超えて行動を起こし新たな価値を生み出していくアントレプレナーシップの重要性に焦点を当てている。

社会科教育においては、小学校学習指導要領（社会編）の目標（2）に、「社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考えたり、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断したりする力、考えたことや選択・判断したことを適切に表現する力を養う。」と記載されている。これは、社会的事象を多角的に考察し、学習課題を追究・解決する活動を通して、社会に参画する意識を醸成することを求めていることが分かる。

また、これまでの実践を振り返ると、立場や視点が明確でない話し合い活動になることが多く、互いの考えを関連させながら練り上げていく話し合い活動を展開することができていなかった。そのため、授業後の児童の振り返りを見ると、知識の習得に終始した記述が多く、知識を活用して新たな考えを生み出した記述があまり見られなかった。

そこで本実践では、社会の課題を自分事として捉え、試行錯誤を繰り返しながら、より良い社会の実現に向けて主体的に行動する児童の育成を目指し、本研究テーマを設定した。社会科教育に「アントレプレナーシップ教育」の視点を導入し、①社会的な見方・考え方を働かせながら自ら課題を見つけ、②実社会とつながりながら、③社会事象についての課題解決策を考える。試行錯誤を繰り返し、④社会に新たな価値を創造しようとする中で、課題解決力や社会に参画しようとする力が高まるのではないかと考えた。本研究では、学習課題を問い直し、多角的に思考を深めるための「問いの整理表」や「シナリオグラフ」などのフレームワークや、リフレクションを通じた協働的交流の有効性を検証し、その学習指導の在り方について明らかにしたい。

(2) 研究テーマに迫るために

① 問いの整理表の活用で見方・考え方を働かせ、多様な表現手段で考えを整理する

本実践では、児童が社会的な見方・考え方を働かせ、多角的に事象を捉えることを重視し、社会的な見方に着目する問いの一覧表である自作の「問いの整理表」（図1）を活用する。活用場面として、単元冒頭の「まちに“ひそむ危険”は何だろう」では、単なる危険箇所の羅列ではなく、「なぜそこが危険なのか（事象・人々の相互関係）」「いつ、どのような状況で危険になるのか（時期や時間の経過）」「広範囲で地震が起きたらどうなるか（位置や空間の広がり）」といった多角的視点から思考を促すようにしたい。また、児童が思考を深めるための「道具」として機能するよう、適切なタイミングで「なぜそう考えたのか？」「〇〇さんの立場だったらどう感じるだろう？」といった発問を重ね、思考

の過程を言語化させることで、見方・考え方を自覚的に働かせられるようにする。

また、児童が事象を捉え、考えを整理する際には、多様な表現手段を用いる。既存の枠にとらわれず、新たな価値を創造するためのアイデアを安心して生み出せるよう、心理的安全性の高い学習環境を構築する。特に、地震に備える防災アイデアを構想するブレインストーミングでは、「どんな意見も否定しない」「自由な発想を歓迎する」といったルールを設ける。

また、発言に自信がない児童も安心して参加できるよう、付箋にアイデアを書き出して共有する時間を設けたり、イラストや図で表現できるようにしたりと、多様な表現手段を取り入れる。

さらに、「シナリオグラフ」のような新たな発想を促すフレームワークを導入し、児童の思考を刺激する。シナリオグラフは、アイデア発想や問題解決を支援するフレームワークで、普段思いつかないような斬新なアイデアを生み出すことができる。

個々のアイデアを丁寧に拾い上げ肯定することで、発想を表現することへの抵抗感を減らし、児童が試行錯誤しながら創造的な思考を発揮できるよう支援する。

② 学びの「可視化」と「協働的な交流」により思考の深化を図る

児童一人ひとりの思考の過程を可視化し、それを学級全体で共有することで、互いの学びを刺激し合い、思考を広げ深めることを目指す。その中心となるのが「学びのリフレクション（スプレッドシート）」の活用である。単元の各段階で児童に自分の考えや発見、アイデアの変遷をリフレクションとして書き残すようにする。そして、定期的に学級内でリフレクションを共有する時間を設け、自分とは異なる考えや多様な視点に触れる機会を創出する。これらの交流活動において、児童は自分の考えを客観的に捉え、他者の視点を取り入れて練り上げていけると考える。最終的に、地域の方への提案会でアイデアを発信する経験を通して、自分たちの学びが地域社会に貢献し得るという社会参画への意識と、新たな価値を創造する喜びを実感することにつなげていきたい。

③ 実社会（地域）とつながることで、様々な立場の視点を得る

多様な他者と関わることで、多角的な視点で物事を考えられるようにする。単元を通じた様々な場面で、専門家や地域の自治会の方と活動を行う。例えば、地震に備える防災アイデアを構想する場面では、防災士の方と相談会を行う。児童のアイデアに対して、専門家がフィードバックし、児童が試行錯誤することで、創造性と実現可能性を同時に学ぶことができる。また、地域の自治会の方と避難訓練の内容や備蓄品について考えたり、まちに潜む危険を探したりする。これにより、児童の「安全は自分も含む地域全体で守る」という意識を育む。さらに、高齢者や年少者の避難支援についても触れ、防災という社会事象について、多様な立場や視点から考える契機とする。そうすることで社会参画への意識を高めたい。

(3) 研究テーマに関わる評価

① 振り返りの記述による検証

スプレッドシートに書き溜めた児童の振り返りの記述による評価を行う。学習課題を意識し、様々な立場から多角的に捉えた課題解決策の考えが表現されたかどうかを見取る。

② アンケートの数値による検証

「友達と意見交流をしたり、資料から分析をしたりして分かったことを関連させながら課題解決策を表出することができたか」という項目でアンケート評価を行う。数値の変化と記述欄を併せて分析する。

分類	時間 時期 	場所 位置 	人 ものごと 
いつ どこ だれ 何	いつ 行われるのか	どこに あるのか	だれが（何を） 生産しているのか
どの ように	どのように 変わってきたのか	どのように 広がっているのか	どのように 関わっているのか
なぜ	なぜ 変わったのか	なぜ この場所にあるのか	なぜその関わりがあ るのか、なぜ必要な のか

図1 問いの整理表

3 単元と指導計画

(1) 単元名

地震にそなえるまちづくり (活動名：地震にそなえる「未来の表町」を創る)

(2) 単元の目標

自然災害から地域の安全を守るための諸活動の特色や関連機関や人々の協力を捉えて、そうした取組の意味を考え、地域に見られる課題を把握して、その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断する力、考えたことや選択・判断したことを表現する力を養う。

(3) 単元の評価規準

知識及び技能	思考力、判断力、表現力	主体的に学習に取り組む態度
地域の関係機関や人々は、自然災害に対し、様々な協力をして対処してきたこと、様々な備えをしていることを理解している。	過去に発生した地域の自然災害、関係機関の協力などに着目して、災害から人々を守る活動を捉え、様々な立場(市民・市・自治会)からの視点を取り入れ、多角的にその働きを考え、課題解決策を練り上げ表現する。	自然災害から人々を守る活動について、予想や学習計画を立てたり、その過程をリフレクションで見直したりして、学習課題を問い直し、主体的に学習課題を追究し、解決しようとしている。

(4) 単元の指導計画と評価計画(全13時間、本時10/13時間)

次 (時数)	・学習内容 *ゲストティーチャー (GT・防災士) 来校日	◎学習課題 ・学習活動 ■予想される児童の反応 *ゲストティーチャー (GT・防災士) による支援	主な評価規準と方法 (評価方法は【】内)
1 (2)	①地震の被害の様子を調べ、地震のイメージを膨らませる。 (8月29日)	◎「地震」とはどのようなイメージだろう。 ・年表や絵図等で地震被害について調べたり、体験車で地震体験をしたりする。(GT) ・地震に対するイメージをウェビングマップにまとめる。 ・GTから体験談を聞いたり、体験したりすることで危険に気づき、実際に表町で地震が発生したと仮定して、学習課題を設定する。 ■地震は何度も起きているから、備えないといけない。 ■家では、どのような備えをしているの。	【知技】過去に何度も地震が起きたことがあり、今後も発生が予想されていることを理解している。【スプレッドシートでの記述】
	*きおくみらい見学 (9月2日)	◎「まちにひそむ危険は何だろう」 ・学校周辺の危険箇所を写した写真や地図を見て、危険な場所や状況を考える。(GT) ■ビルやお店などの建物が多く、看板が落ちてくるかもしれない。 ■避難するとき、〇〇の道が狭いから、色々な人が通れないかもしれない。	【態】地震の危険性を理解し、そのように備えたらよいか、予想を立て、課題解決の見通しをもっている。【スプレッドシートでの記述】
	②身近な地域に潜む危険について、予想しすることで、まちに関心を与える (9月4日)		

③④地域の自助・公助・共助の防災に関する課題を多角的な視点から発見し、共有する。関わる様々な機関や人々の具体的な活動と連携について理解を深める。
(9月9日2時間)

⑤自分や家族の備え、市の防災の取組について調べる。
(9月10日)

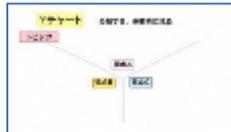
⑥共助が必要な理由や、自治会の取組内容について調べる。
(9月11日)

⑦地域の防災課題を解決するための新たなアイデアを自由に発想する。
(9月22日)

⑧構想した防災アイデアを具体化し、「未来のまち」づくりとして表現する。
(9月25日)

◎防災についての課題を洗い出そう。(地震発生後の課題)

- ・市民、市、自治会のそれぞれの立場に立って、どのような課題があり、どのような考えをもっているか」等を考え、Yチャート図に整理する。
- ・明らかになったそれぞれの立場の考えや取材の内容を基に、地震に対する地域の困り感や不安を書き出し、意見交流をする。
- ・学校周辺の地図やハザードマップを活用しながら、危険箇所や避難経路、避難場所などを確認する。(GTと保護者)
- 高齢者が多く、一人で避難しづらいという課題がある。備えないといけない!
- 防災セットでは、何がどれくらい必要なのかわからないという課題がある。



思判表各機関の役割や関わる人々の思い、それぞれの連携、それぞれの課題などについて捉えている。【スプレッドシートでの記述】

◎みんな(自分・家族・市)は、どのような備えをしているのか。

- ・非常持ち出し袋、自治防災活動の資料、公的機関の資料等を活用し、自助・共助・公助の内容について調べ、ノートにまとめる。(家の人に取材をする。)
- 家では、家具を留めたり水を保管したりしている。(自助の視点)
- ハザードマップや設備などで、市民が避難できるようにしている。市は県や消防などと協力している。(公助の視点)

知技市は住民を守るために、県や国の関係機関と協力していることを資料から読み取っている。【スプレッドシートでの記述】

◎自分も市も防災の取組をしているのに、なぜ共助が必要なのか。

- ・年々、被害者数が減っていることが分かる資料を読み取り、共助の必要性を捉える。自分たちの地域での取組を調べ、ノートにまとめる。(GT)
- 自主防災倉庫に備えをしていたり、防災訓練をしたりしているから、地震があっても被害が少なくすんでいる。

知技地域の人々は地震に備えて自分たちに行っている取組を行っていることを理解している。【スプレッドシートでの記述】

◎地震に備え、どのようなまちの防災アイデアがあるだろう。

- ・発見した課題に対し、だれが、いつ、どこで、何をするかを付箋に書き出す。それをシナリオグラフで整理し、防災アイデアを考える。
- 地域のみんなで取り組む避難訓練を定期的に開催する。
- 避難するときの防災セット説明書を作る。



思判表前時に発見した防災に関する課題を基に、地域の自助・公助・共助の多角的な視点から、防災アイデアを創出している。【スプレッドシートでの記述】

◎防災アイデアを紹介するための材料を作ろう

- ・出したアイデアの中から実現可能性や効果などを考慮しながら、具体的な防災策として考える。
- ・絵、ポスター、スライド資料などを次時の検討用に簡易的にまとめ、アイデアを表現する。同じ意見の児童同士、協力しながら作業を進める。
- 住民主権の避難訓練計画書を作ろう。
- 地震時に持っていく防災セットの説明

態地震に備えた防災アイデアについて、学んだことを踏まえて考え選択・判断し、表現しようとしている。【スプレッドシートでの記述】

	<p>⑨⑩ 防災アイデアの提案内容を多角的に検討する。 (本時) (10月1、2日)</p>	<p>をするポスターを作ろう。</p> <p>◎防災アイデア相談会</p> <p>・「未来のまち」の防災アイデアをグループごとに発表し（前後半で2時間）、前時までに整理した課題のYチャート図や資料、GTからの助言などを基に、互いに良い点や改善点について意見を交換する。そして、提案内容を修正・改善する。 ■住民主催の避難訓練で市が作ったハザードマップを活用することにしよう。</p>	<p>【愚判表】地域の公助・共助の視点から、防災アイデアの実現性や具体性を検討している。【スプレッドシートでの記述】</p>
	<p>⑪⑫ もらった意見を基に、修正と再検討を行う。(⑧⑨を繰り返す。) (10月6、7日)</p>	<p>◎相談会をしながら、防災アイデアを練り直そう。</p> <p>・提案に係わる具体物の修正をし、相談会として、GTとアイデアを練り直す。</p>	<p>【愚判表】地域の公助・共助の視点から、防災アイデアの実現性や具体性を検討している。【スプレッドシートでの記述】</p>
3 (1)	<p>⑬ 地域の防災課題解決に向けた「未来のまち」の防災アイデアを地域の方に提案する。 (10月8日)</p>	<p>◎『未来の表町』の地震のそなえを提案しよう。</p> <p>・絵、ポスター、スライド資料などで、防災アイデアを発表する。(GT) ・提案活動を通して感じたこと、学んだこと、今後の社会との関わり方について振り返る。 ■地域住民の避難訓練計画書を紹介。 ■市が配付する防災セットを示したポスターや模型を紹介。</p>	<p>【愚判表】未来のためにできることを根拠を明確ににして表現している。【スプレッドシートでの記述】</p>

4 単元と児童

(1) 単元について

本単元は、現代社会が抱える喫緊の課題、「地震の頻発化と防災意識の向上」を背景としている。近年、日本列島では、能登半島地震（令和6年）、熊本地震（平成28年）、東日本大震災（平成23年）など、大規模な地震が頻繁に発生している。これらの災害は、私たちの日常生活に甚大な被害をもたらし、地域の安全、そして人々の生活に深い影響を与え続けている。このような状況の中、児童が地域社会の一員として安全に、そして安心して暮らしていくためには、「自分たちのまちは自分たちで守る」という意識を育むことが不可欠である。本単元では、単に地震の知識を学ぶだけでなく、実際に地域に潜む危険を発見し、自民・市・自治会のそれぞれの立場から関係機関の働きを考察しながら、自分たちが主体となって「未来のまち」の防災という新たな価値を創造していく体験を通して、課題解決策の考えを表現する力、社会に参画しようとする力を育むことを目指す。

(2) 児童の実態

実践前に行ったアンケート（表1）では、項目②の「友達と意見交流をしたり、情報を分析をしたりして自分の考えを表現することは得意ですか」について否定的な回答をした児童が31.6%であった。意見交流や資料の分析で考えをまとめることや、自らの考えを進んで表出することに苦手意識をもっていることが分かる。

本単元では、思考を整理する場面の設定や協働的な交流を通して、自分の考えに自信をもって楽しみながら表現できるように学習を進めていく。

表1 児童へのアンケート
(男子6人、女子14人 計20人の学級)

児童への質問 (対象児童：男子6人、女子14人 計20人)	「はい」	どちらかといえば「はい」	どちらかといえば「いいえ」	「いいえ」
① 自分で課題を発見することは得意ですか	31.6%	31.6%	26.3%	10.5%
② 友達と意見交流をしたり、情報を分析をしたりして自分の考えを表現することは得意ですか	26.3%	42.1%	26.3%	5.3%
③ ②のように答えた理由は何か	<ul style="list-style-type: none"> ・友達に気付いたことを話すことができる。でも、文にしたり、発表したりすることが苦手。 ・思ったことを言葉にすることが難しい。 			

5 本時の展開（令和7年10月1日実施）

(1) ねらい

これまで作成した思考整理のフレームワークの活用や他者との意見交流によって、これまでに構想した「未来のまち」づくりの防災アイデアを、より多角的な視点から検討・修正して、説得力のある提案へと深化させることができる。【思考・判断・表現】

(2) 展開の構想

本時では、個人や各グループで完成した「未来のまち」づくりの防災アイデアの構想を発表し合う時間を設定する。この際、単に「すごい」「いいね」といった感想で終わらせることなく、前時までに深めた自助・公助・共助の働きや、防災士との意見交流で獲得した多様な立場（市民、市、自治会など）の視点を意識させ、具体的な意見交換を促す。例えば、「このアイデアは、お年寄りの人にとってどうかな？」「市役所の人、このアイデアを実現するために何が大変だと感じるだろう？」といった問いかけを教師が行うことで、児童が自らのアイデアを客観的に捉え直し、他者の視点を取り入れるきっかけをつくる。また、これまで活用してきた思考整理のフレームワークや書き溜めたりフレクションを議論の視点として示すことで、思考の深まりを促したい。

(3) 展開

時間	○学習活動	◎教師の働きかけ ■予想される児童の反応	□評価 ○支援 ◇留意点
導入 5分	○前時の学習活動を振り返る。	◎前時までに整理した思考のフレームワークやリフレクションを示し、話し合う際の視点を確認する。 ◎確認した視点をどのように使って話し合うか、例を示す。 ■住民主催の避難訓練計画書を作ろう。	○第3・4時でまとめた課題の板書を見せながら、全員が同じ認識をもてるようにする。
◎防災アイデア相談会 防災アイデアをどのような形で実現するか			
展開 25分	○集団解決 個人やグループで構想してきた防災アイデアの大まかな内容を全体で共有する。	●個人やグループで構想してきた防災アイデアの大まかな内容を発表し、それに対して助言や新たな提案を受ける。 ■（「いつ・どこ・だれ・どのように」）の視点から）高齢者や小さな児童も安全に避難できるか考えたほうが良いと思うよ。 ■（「もし○○なら」）の視点から）もしも、夜だったらどうするか。 ■（「もっとよくするには」）の視点から）自分たちの地域だけではなく、他の地域の計画と比べたり、一緒に取り組んだりすると、さらに多くの人の防災意識が変わるかもしれないね。 ◎個人同士、グループごとに集まり、挙げられた意見をもとに自分の防災アイデアを再検討する。 ・このままの内容だと自分たちの意図が伝わらないんだね。 ・説明が足りなくて伝わり切らなかったから、もっと具体的なものを作ってまた提案しようよ。 ■みんなの意見を参考にして、「だれ」向けなのかを書いてもっと具体的にしよう。 ■夜だったらどうするか考えて、違うパターンでも作ってみよう。	○資料の情報を全体で確認する。 ◇意見を否定するのではなく、建設的な言い方になるよう促す。 ○意見を述べる際、思考のフレームワークや資料を根拠とするように促す。 ○児童が自らのアイデアを客観的に捉え直せるように、教師が問い返しをしたり、構造的に板書をしたりする。

終 末 10 分	○振り返り 意見交流をと おして、学習 課題に 対する自 分の考 えをま とめる。	◎話し合った内容から、自分の考えを表すように促す。 ■住民主催の避難訓練計画書を作るとき、だれを対象にするのか、他の立場でも考えないといけないと感じた。高齢者が避難するためには、地域の人と協力することが欠かせない。そのため、共助の考えを大切にして、普段から声を掛け合ったり、グループを作ったりしておくなどしておくようにすることを避難訓練計画に書く。	□話し合った内容をもとに、防災アイデアを、より多角的な視点から検討・修正し、説得力のある提案へと深化させて記述することができる。 【スプレッドシート/思判表】
-------------------	--	---	--

(4) 評価

話し合った内容や資料をもとに、地域の防災課題や災害への備え、関係機関の働きに触れながら、学習課題に対する自分の考えを記述することができる。【思考・判断・表現】

A (十分に達成している)	B (おおむね達成している)	C (努力を要する)
地域で起こり得る災害を想定し、学びのポートフォリオや資料を基に根拠を明らかにしながら、市民・市・自治会の立場からの考えを踏まえて、自分たちにできることを考え表現している。また、意見交換でのフィードバックから提案内容を修正・改善している。	地域で起こり得る災害を想定し、学びのポートフォリオや資料を基に根拠を明らかにしながら、自分たちにできることを考え表現している。また、意見交換でのフィードバックから提案内容を修正・改善している。	Bに満たない。

6 実践を振り返って (成果と課題)

(1) 授業の実際

【①問いの整理表の活用で見方・考え方を働かせ、多様な表現手段で考えを整理する】

単元の第1時で、地震体験車に乗り、震度6の地震を体験したり、市の担当者の方から避難の仕方を聞いたりした。児童は地震体験で、「物が倒れてきて、すごく揺れて怖かった。」「いつ起こるか分からないから、備えないといけない。」と素直に感じたことを話していた。市の方からは、被災時の様子や、被災者が感じていたことなどについて話していただき、写真資料も使いながら地震に対するイメージを全体でまとめた。第2時の「まちに“ひそむ危険”は何だろう」では、地域に潜む危険と思われる個所について考えた。その際、児童が社会的な見方・考え方を働かせ、自らの課題としていけるように、社会的な見方に即して自作した「問いの整理表」(図1)を活用した。第1時の振り返りでは、「怖かった。」「思ったより揺れていた。」という、直感的な感想に終始していたものが、整理表の観点の部分と照らし合わせながら、地震で想定される危険を考えたときは、「揺れが大きいときは、この塀も倒れるかもしれない。(時期や時間の経過)」「このマンションや店からたくさんの人たちが避難してきたら、避難所にたどり着けるのか。(位置や空間の広がり)」「避難所の学校はそんなに人が入れるのか不安。(事象・人々の相互関係)」などというように、より具体的な考え方が生まれた。さらに、教師が「なぜそう考えたのか。」「〇〇さんの立場だったらどう行動しますか。」と問い、思考を言語化させることで、「自分も地域の人たちも守れるようにしたい。」という思いをもつようになった。そのような児童の考えを基にして、単元を貫く課題「地震にそなえる未来の表町を創る」を設定(提示)した。社会的な見方・考え方を働かせて考えたことで、課題を自分事に引き寄せ、自らのとるべき行動を考え始めた姿だと捉えられる。

また、ある児童は、防災士の方から「ペットを飼っている方の同行避難について」という話を聞き、振り返りを書く際に、問いの整理表を見ながら「それなら、病気の方は、避難所でどのように過ごしたらよいか。」「旅行中で、避難する場所が分からないときは、どうしたらよいか。」などと疑問を抱いた。

そこで、続く活動では、予想される防災上の課題を洗い出し、それに対する解決策である防災アイデアを構想する時間を設定した。自由に付箋にアイデアを書き出して共有し、新たな発想を促すフレームワーク「シナリオグラフ」に整理した。教師もグループに入りながら、個々のアイデアを丁寧に拾い上げ肯定することで、発想を表現することへの抵抗感を減らし、児童が試行錯誤することに集中できるように努めた（図2）。



図2 シナリオグラフに整理した様子

避難所での過ごし方や避難所の場所に防災上の課題があると考えていた児童らは、「(誰が)市の人、大人、子ども」「(いつ)旅行中、災害時」「(どこで)駅、ホテル、駐車場」「(使うもの)地図、アプリ、回覧板、薬」「(どうやって)隔離する、車で避難、薬を持参、近くの人に聞く」などと付箋を出し合った。グループで付箋を出し終えた後、一つの防災アイデアを形作る活動として、実際に活用する様子、つまり、シナリオをイメージして付箋の言葉をつなぐ活動を行った。児童は、防災士から教えていただいた被災者の方の経験を思い出し、「避難所の過ごし方を前もって知ってもらおうとよいかもかもしれない」「スマホはみんなが持っているから、旅行中でも情報を手に入れてすぐに対応できそうだ」などと意見を伝え合い、解決策となるように付箋の言葉をつないでいった。意見交換後の児童から、「アレルギー問題もあるから、自分の薬を自分で用意するように呼び掛ける」「避難所についての情報を手に入れられるアプリのことを教える」「病気の方の専用スペースや場所を用意する」など、新たな考えが生み出された。『誰が』、『どこで』などといった視点があることで、自然と比較したり、組み合わせたりする思考が生まれた。また、自由度の高さから、「もっとアイデアを書きたい!」と前向きに考える姿が多く見られ、学ぶ意欲の向上にも結び付いたと考える。

これらのことから、社会的な見方・考え方を働かせて、思考を整理する多様な手段は、新たな価値の創造を促すうえで有効であったと考えられる。

【②学びの「可視化」と「協働的な交流」により思考の深化を図る】

「学びのリフレクション(スプレッドシート)」で児童の思考の過程を可視化し、児童自身が思考を広げ深めることを目指した。単元の各段階で、アイデア、疑問、考えを書き残し、学級で共有することで協働的な交流が生まれるように活用してきた(図3)。

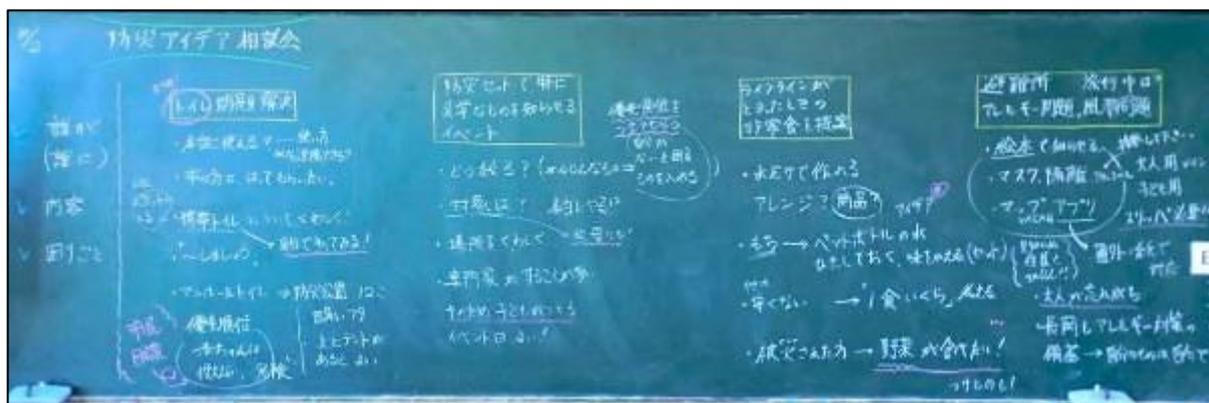


図3 防災アイデア相談会時の板書

第9.10時では防災アイデア相談会を行い、児童が互いによかった点や改善点、代案などの意見を出し合い、自らのアイデアを練り上げていった。相談会は繰り返し行い、リフレクションとして書き残すことで、児童が自らの課題に向き合い、再検討と修正を繰り返し

ていく姿が見られた。例えば、ある児童は、避難所での過ごし方についてパンフレットにまとめて提案した。その内容や書き方について、相談会で提案すると、防災士から「防災用品の中で、薬を持っていくことが大切だけれど、大人はつい忘れがちなんです。」と教えていただいた。すると、次のような交流が見られた。

防災アイデア相談会で、協働的な交流により思考を深めたと考えられる場面 *GT: 防災士のゲストティーチャー C1: 提案した児童	
GT: 防災用品の中で薬をもっていくことが大切だけれど、大人はつい忘れがちなんです。だから、風邪や持病のある方に対して、よりよい避難の仕方を伝えるのはすてきなことです。	
C2: 大人の人に分かってもらうだけではなく、児童も読みやすくして、短い文にするとよいと思います。絵があって、持っていくものが分かりやすかったです。	
C3: ぼくも、「確かに」と思いました。まず“自助”が大切だと思うから、『防災グッズは自分で確認しよう』という言葉がよいと思いました。	
C4: すごく見やすいと思ったけれど、家から遠い所にいるときとか、家の人がいないときとかに、避難することになったら、どうしますか。	
C1: 持っていくものが多いし、いざとなったら困ると思いました。でも、自分で前もって確認しておくしかないと思います。あとは、考え中です。	
C3: ぼくたちも防災セットのことを書いているのだけれど、優先順位を決めておくことが大事だと思ったから、そういうことをランキングとかで書くことよいと思います。そこに旅行中バージョンとか、薬のこととか書けばいいんじゃないかな。	
C1: いざというときは焦るから、確かにランキングにしておくことよいと思いました。やってみます。	
GT: 病気の方や旅行中のことも考えてすごいいね。コロナのときも避難の仕方が大変だったけれど、人々は何に一番困ったと思いますか。(交流が続く)	

提案者の C1 児は、C4 児の質問を受けて、避難の仕方について、新たな課題に気付くことができた。漠然と「防災セットの中に薬を用意することが必要だ」と考えていたものが、質問や代案をもらうことで、「優先順位を決めておく」と話すように、表現に具体性をもたせようとする姿が見られた (C3 下線部)。さらに、次の相談会を展開する前に、学びのリフレクションで振り返りを書く時間、他の児童の振り返りを確認し、共有する時間を設定した。すると、C1 児の意見が次のように変化した。

防災アイデア発想時の振り返り	→	防災アイデア相談会後の振り返り
避難所に行って何をすればよいか気がになりました。理由は、初めて避難所に行った人は何をすればよいか、どういう行動をすればよいか分からないからです。家が崩壊していたら、避難所に行くしかないけれど、車があったら避難所に行かないで車の中に避難すればよいかもしいないと思った。薬は必要だと思う。それから旅行に行っていたら、クレジットカードも使えなくなるので、お金も持っておかないといけないと思いました。		今日、社会で防災アイデア相談会をしました。参考になることがたくさんありました。商品開発をするチームもありました。とても聞いていておもしろかったです。自分が好きじゃない食事だったり、食事が不十分だったりすることなどが「確かに」と思いました。アレルギーとかそういう事も考えると商品開発は、とても大変だと思いました。でも、そういう人のことも考えてアイデアを考えようと思いました。その他のチームは、防災グッズリストみたいなものを作っているチームもありました。わたしたちは、作り途中なのですが、一目で分かるリストが見た人にとって分かりやすいし、やってみようと思いました。またアイデアをたくさんもらいたいです！楽しかったです。

他者と考えを伝え合う協働場面においては、相手の考えに共感したり、自分にはない価値観に触れたりして刺激し合う姿があった。学びのリフレクションを参考に考えをまとめる場面においては、他者の意見を自分の考えに生かし、よりよく作り変えていこうという行為のおもしろさを感じる姿が多く見られた。これらのように、学びの「可視化」と「協働的な交流」により、思考の深化が図られたと考える。



図 4 相談会後の再検討場面

【 ③実社会（地域）とつながることで、様々な立場の視点を得る 】

本実践では、実社会の多様な立場の人々との出会い、その人の立場に立って防災上の課題を考えることで、独りよがりな考えから脱却させたいと考えた。そこで、単元を通して

様々な場面で、専門家や地域の方と交流する場を設定してきた。

例えば、第3時からの活動では、市、自治会、市民のそれぞれの立場に立って、防災上の課題を洗い出す座談会を実施した。校区内在住の防災士の方、防災教育を推進するNPO法人の方、保護者が参加し、それぞれの立場から児童と意見を交わすことができた。



図5 課題を洗い出す座談会

A児が「避難所にみんな集まることは想像していたけど、女の人も男の人も一緒だとプライバシー問題が困ると思った。トイレも絶対足りないと思う。」と話すと、専門家から、中越地震当時の避難所の様子として、「場所が足りずに、車の中で避難生活をする人もいたんだよ。どうしたらよいか。」と専門家に問い返される場面があった。「数を増やしたり、住む場所を分けたりしたいけれど、スペースが足りずに困ると思う。」「テントを持ってきてもらうこともよさそう」などと、想像を膨らませ、解決策を考え始める様子が見られた。

また、B児は、「市のパンフレットを見ても、必要な防災グッズがありすぎて、どれが必要か分からなかった。3日分の水9Lなんて運べない。」と話していた。実際に家から避難する行動について、保護者の方とシミュレーションしながら、その大変さを改めて感じながら話していた。そして、防災士の方から「いざという時は、とても焦るもので、避難時に転倒してしまう人が多い。」と聞き、さらに意見を交流する中で、「防災セットにも優先順位を決めておくと、安心すると思う。それをお知らせするイベントをしたり、ポスターを作ったりするとよいと思う。」という意見に思いが至った。

このように、他者の立場に立って物事を考え、自分にもできることはないかと模索を始める姿が、私が目指す学習課題を問い直しながら多角的思考で追究する児童の様相である。

(2) 研究テーマに関わる評価

① 振り返りの記述から

活動の後半である第10時では、以下のような振り返り記述（一部抜粋）があった。

私が学習で今後大切にしようと思ったことは、3つあります。1つ目は防災グッズを揃えることです。私は最初、どこに防災グッズがあるのか、使い方などが分からないでいたので、使い方もどこにおいてあるのかも覚えたいほうが、もし災害が起きたときにすぐ持っていけたり、すぐ使えたりすると思いました。優先順位のことを友達からアドバイスをもらって、万が一のときに焦っても、対応できるようにしないといけないと思いました。これは、私たちが作った防災グッズのパンフレットを高齢者や子どもにも見ってもらって、これだけは意識してほしいと思います。2つ目は、避難のことで、私は避難できるのは小学校だけだと思っていたけど、みんなの紹介を聞いて、トモシアや公園でも避難できることが分かりました。あらかじめこの避難所に行くか話し合っ、災害時のときには焦らないで避難できるようにしたいです。3つ目は、(中略)。私が社会の学習で地震について考えたことはやっぱり地震は怖いということです。それは止められないから、自助、共助、公助の意味を知っておきながら、いつでも起こってもよいように準備をしたほうがよいと思いました。大事だによってことを家族に伝えたいと思います。

「防災グッズの使い方や在りか」についての記述から、地震という事象からその課題を自分事として見出ししていること、「優先順位のことについて意識してほしい」という記述から、自分なりの解決策を練り上げてきたことへの自信がうかがえる。また、「高齢者や子どもにも知ってほしい」という記述は、様々な立場の方の思いを想像した上で追究してきたからこそそのものであったと考える。

本実践では、まず実社会で活動する他者との体験を伴った交流から活動を生み出すことで、課題に正対し、追究しようとする思いが生まれた。そして、多様な立場から課題

を見つめ、解決に向けて協働的に学ぶ場を繰り返し設けていくことで、自身の捉える防災上の課題を問い直し、防災アイデアとして、多様な表現手段で再構築する様相が見られた。

② 単元の前後における児童の学習アンケート比較から

表1 児童への学習アンケート（男子6人、女子14人 計20人の学級）

児童への質問 (対象児童：男子6人、女子14人 計20人)	単元実施前				単元実施後			
	「はい」	どちらかといえば「はい」	どちらかといえば「いいえ」	「いいえ」	「はい」	どちらかといえば「はい」	どちらかといえば「いいえ」	「いいえ」
① 自分で課題を発見することは得意ですか	31.6%	31.6%	26.3%	10.5%	36.8%	47.4%	15.8%	0.0%
② 友達と意見交流をしたり、情報を分析をしたりして自分の考えを表現することは得意ですか	26.3%	42.1%	26.3%	5.3%	26.3%	52.6%	21.1%	0.0%
③ ②のように答えた理由は何ですか	<small>・友達に気付いたことを話すことができる。でも、文にしたり、発表したりすることが苦手。 ・思ったことを言葉にすることが難しい。</small>				<small>・友達のアドバイスを聞いて、自分の発表に付け足そうようにした。考えを発表するのは少し苦手だけど、キャンパとかを使って考えをまとめることができるようになったから。 ・相談会で、たくさん話したから自信がついた。</small>			

アンケート項目①②の肯定的評価（「はい」「どちらかといえば『はい』」）の数値が上がっている。この結果から、多様な他者との交流から多角的に思考したり、友達と交流しながら自己の考えを深め、新たな考えを生み出し表現したりすることへの自信につながったと考える。

しかし、事実に基づいた資料を正確に読み取り、整理・分析するまでの過程は、一人一人の資質・能力頼みとなってしまったこともあり、結果に個人差が見られた。資料や体験から情報を読み取ったり、情報同士を関係づけていたりする際の手立てを再考する必要がある。

(3) 今後の課題

本実践では、社会的事象を多角的に考察する力は育ったものの、そのアイデアが実社会の具体的な制約（費用、法令、実現にかかる労力など）を踏まえた「実現可能な解決策」として落とし込めるかどうかという点に課題が残った。児童に身に付けたい力や学習内容、児童の実態を総合的に考え、多様な視点から得た情報を、現実的なコストや制約といった要素と統合し、実効性のある解決策へと高めるための手立てについて、今後も実践をとおして検証していく。

7 参考文献

- ・小学校学習指導要領解説 社会偏」文部科学省(2017.7)
- ・長橋俊文 「社会的事象を自分事として捉え、問題解決を通して社会的視野を広げる児童の育成」『上越教育大学教育実践研究』 第27集、2017年、37～42pp
- ・新潟県教育委員会『キャリア教育をアップデートする～アントレプレナーシップ教育～』
<https://www.pref.niigata.lg.jp/sec/kyoikusomu/1306098008153.html>